

核兵器に頼る国のリーダー達へ

長崎大学多文化社会学部 4 年 南真里帆

私は阪神淡路大震災で壊滅的な被害を受けた神戸市の出身である。そのため、小学生の頃から地震などの自然災害の恐ろしさを授業などで頻繁に学んできた。しかしながら、人的災害と呼べる核兵器のもたらす恐ろしさについて学んだ記憶がほとんど無く、認識していたのは広島・長崎に原子力爆弾が投下され、多くの方々が亡くなったという教科書に記載された内容のみであった。

ご縁があって長崎大学に進学し、興味本位で一年次の選択科目の講義にて平和講座を受講した。また、講座終了後にも長崎原爆資料館へ友人と足を運んだ。そこで実際に目にした事実と内容に私は大きな衝撃を受けた。第二次世界大戦中に起きた多くの争いは基より、原子力爆弾・ファットマンたった一発で 7 万人以上の長崎市民の命が一瞬にして吹き飛ばされたからだ。ただれた肌、熱さのあまり川へと自ら身を投げ出す人々、家々が吹き飛ばされ跡形もない街の殺風景さ、丸焦げになった無数の遺体など、写真や絵を見るだけで原子力爆弾の脅威と破滅さを感じた。講義の内容や資料館の展示物を見た後、考えれば考えるほど、「なぜ 21 世紀という発展した現代国際社会にあるのにも関わらず、世界は核兵器を手放さないのか?」「核戦争はいつか本当に現実化してしまうのではないのか?」「世界はまた広島・長崎の悪夢を望むのか?」「核兵器のない世界は果たしていつ到来するのか?」など、疑問が途絶えることがなかった。

核兵器はまた、物理的な破壊行為だけではなく、放射能による癌等の深刻な病気や遺伝子変異によって人々の人生そのものを苦しめる。広島・長崎への原子力爆弾投下、マーシャル諸島での核実験、チェルノブイリ原発事故、東日本大震災による福島第一原発事故など、放射能による被害に苦しむ人々は現在も多くいる。そして被爆者本人のみならず、子供やその後何世代に渡る癌罹患率や死亡率にも深く関係してくる。まして核が戦争などで使用されれば、人体への悪影響はもちろん、人類滅亡も十分に起こり得るのではないのか。

核兵器に頼る国のリーダー達よ。あなた方はまた、1945 年に日本で起こったあの広島・長崎の悪夢を望むのか。もう一度、あの悪夢によって苦しむ世界の人々を目にしたいのか。核兵器の保有は決して人類と母なる大地・地球に平和をもたらさない。世界の偉大なる指導者達よ。我々人類は、核兵器保有といった脅威によるものではなく、外交と対話を通じた信頼関係の構築、そして核兵器放棄による世界平和実現のための一步を今踏み出すべきではないだろうか。

核兵器に頼る国のリーダー達よ。世界平和のために核兵器廃棄を決意し実行した国もあるのだ。その国とは、カザフスタン共和国である。セミパラチンスク核実験場(セメイ市)では、ソビエト時代に 456 回も核実験が行われた。その結果、多くの一般市民が放射能による後遺症に苦しんだという痛ましい歴史がある。カザフスタンはソビエト連邦解体後の 1991 年から非核化への道を着々と歩み、核不拡散条約(NPT)や包括的核実験禁止条約(CTBT)への加盟、ネバダ・セメイ国際反核運動などを推し進め、そして遂に自国の非核化を実現させた。核兵器の廃棄という選択を取ったことで、自国と世界平和に貢献したと言っても過言ではない。カザフスタンの核兵器廃棄を例に、核兵器に頼る世界のリーダー達、あなた方にもぜひ非核国家の実現をしていただきたいのだ。

核兵器に頼る国のリーダー達よ。もう一度、我々人類が繰り返してきた数々の戦争や歴史を振り返っていただきたい。そして、アルベルト・アインシュタインの残した、この言葉をどうか思い出していただきたい。“I don't know with which weapons World War III will be fought , but World War IV will be fought with sticks and stone.”—「第三次世界大戦がどのような兵器で戦われるかは定かではないが、第四次世界大戦は石と棍棒で戦われるだろう。」—核廃棄という道を歩まなければ、これまで人類が築き上げた文明はいつか人類が破壊するだろう。そして、アインシュタインが主張するように、人々が石と棍棒で争う日もそう遠くないかもしれない。

核兵器に頼る国のリーダー達よ。どうか繰り返された戦争の歴史、そしてアインシュタインの言葉を思い出していただき、核廃棄の道を歩んでいただきたい。核軍縮は決して空想的な夢物語ではなく、愛する地球の安全と人類の生存を守るために必要な道なのだ。核兵器も戦争もない世界で我々が科学や知識を正しく使用し、地球・人類の平和と幸せを作る、そのような世界を目指していきたい。これが私からのメッセージである。